

個性あふれる作品並ぶ

近大生ら、けんむんアート展

瀬戸内町

瀬戸内町で合宿を行った近畿大学文芸学部造芸術学科の学生13人は

イン合わせて約50点を展示し、来場者の目を楽しませた。

9日、同町古仁屋のせとうち海の駅で「けんむんアート展」を開いた。同町清水にある焼き物サークル「こんぶち」(藤井博子さん主宰)の会員も出品し、合同展示会とした。それぞれが思い描くケムンをテーマにした陶芸作品、Tシャツデザ

合宿は昨年夏以来2回目、展示会は初めて。県離島振興課の助成を受けたアイランドキャンパス事業の一環で、滞在中は作品制作のほか、地元住民から奄美の歴史や方言、ケムンについて話を聞くなど交流を深めた。

同学科の上田順康准教授は「昨年は作品を作るばかりだったが、今年は奄美の良さをより満喫できたのでは。来年もまた開きたい」と充実ぶりを語った。インターネットなどでケムンの下調べをしてきたという左近麻友子さん(19)は「奄美に来るまでは恐ろしいイメージしかなかったが、地元の人のお話を聞き、親

しみがわいた。満足のある作品ができた」と笑顔で語った。

それぞれが思い描くケムン作品を並べた「けんむんアート展」は9日、せとうち海の



瀬戸内町で合宿を行った近畿大学文芸学部造芸術学科の学生13人は、9日、同町古仁屋のせとうち海の駅で「けんむんアート展」を開いた。同町清水にある焼き物サークル「こんぶち」(藤井博子さん主宰)の会員も出品し、合同展示会とした。それぞれが思い描くケムンをテーマにした陶芸作品、Tシャツデザ

自然や文化学び、発表会も

40人、瀬戸内町でゼミ合宿

近畿大学文芸学部



「近畿大学文芸学部
in 奄美」と銘打ったゼミ合宿で近畿大学文芸学部(大阪府)の学生約40

人が1日から瀬戸内町を訪れている。地元の人々と交流を広げながら奄美の自然や文化に触れ、学

生自身の体験に基づいた企画立案プロジェクトを提案する。

県離島振興課の助成を受けたアイランドキャンパス事業の一環。奄美合宿は祖父が瀬戸内町出身の清眞人同学部教授の勧めで昨年からは始まり、今年と同町清水と加計呂麻島を拠点に活動している。

2日は同町商工会元事務局長の義永秀三さん(78)を講師に迎え、奄美の歴史や方言について学んだ。義永さんは「水」と「目」、「血」と「乳」

義永さんの講話に耳を傾ける学生ら「2日、瀬戸内町清水公民館

を例に奄美市名瀬と同町古仁屋で発音が異なることを説明。奄美群島の島々の個性を語り、「奄美には中国や沖縄、鹿児島文化が入り交じったものが存在する」とまと

めた。合宿は10日まで。滞在中はケンムン村の中山清美村長(奄美博物館館長)の講演会や古仁屋八月踊り保存会との交流会などを予定している。終盤は

活動の集大成として関係機関代表を招いた発表会や、ケンムンをテーマにした作品を紹介する「ケンムン・アート展」を開く。

近大生が瀬戸内町滞在

「島」キャンパスに

観光 民俗調査、アート制作 立案や観

県のアイランドキャンパス事業の一環で、近畿大文芸学部38人が1日から瀬戸内町に滞在し、民俗調査や観光企画などの課題に取り組んでいる。アート制作や公開講座で地元住民とも交流。それぞれの課題成果は公民館などで発表される。



「けんむん」の講座を聞く学生たち

課題は①エコツアー
②の企画立案③民俗

の間に甲斐の「けんむん」をテーマにした陶芸・Tシャツ作成。3グループが6日間と9日間の日程で滞在する。同大の清原人教授の祖父が清水出身者で、2年前から同町でゼミをする。清水出身者で、2年前から同町でゼミをする。清水出身者で、2年前から同町でゼミをする。

室長の中山清美さんが「けんむん」を講座で言い伝えや文化背景などを紹介し「自然の番人」で島の文化を伝える。足元から気付けくことは多い」と伝えた。民俗調査をする同大4年の本並宏修さんは「観光企画」と「民

のイメージとは少し違う。一つの木に対する親しみなど自然との近さを感じた」。清原教授は「卒業生にもリピーターが多い。『夏のキャンパスは奄美』という形で続けられたら」と話した。7日午後から町中央公民館「ト」は9日に海の駅で